

創新教育推進班の取り組み2025～地域・国際連携の報告～

玉有朋子、森口茉梨亜、石原佑、清水真理香（徳島大学 高等教育研究センター 学修支援部門 創新教育推進班）

背景

徳島大学 高等教育研究センター 学修支援部門 創新教育推進班では、今までにない新しいアイデアを生み出し、社会の様々な課題を解決できる真のイノベーション人材を育成することを目的としており、アイデア創出、ものづくり、社会実装といった0から100までの首尾一貫したイノベーション教育体制を目指している。

高等教育研究センター 学修支援部門 創新教育推進班

イノベーションデザイン担当	「課題の探索と解決のための新規アイデア創出」を支援
イノベーション創成担当	学生の自主・共創の精神を養成し、学部学科の分野を横断する自主的なプロジェクト活動を支援
社会実装担当	学生生活から生まれたアイデアの実社会への実装に向けた取組みを支援

1.イノベーションデザイン



第3期を迎えた徳島大学i.schoolでは、選考を経た学部生14名が2期生となり、加えて1・2期生9名(学部生・社会人)が3期生の伴走支援を行う学生DPとして活動した。

11回の通年プログラムでイノベーション創出手法を学び、富士通デザインセンター「インスピラボ」とのワークショップ(WS)や、脇町高校、徳島市健康長寿課の認知症に関するWS、美土利会の防災WS等の外部WSなど、高校や地域との連携のもとイノベーションワークショップを実施した。



図1. 通年ワークショップ



図2. 脇町高校での外部ワークショップ



図3. 美土利会防災の外部ワークショップ



図4. 富士通インスピラボの外部ワークショップ

2.イノベーション創生

イノベーションプラザでは、自主的な学生プロジェクト活動を支援している。現在は教養教育科目の「イノベーションプロジェクト入門・実践」を開講し、学生らはそれぞれが立てた目的を達成するために計画を立てて活動を行っている。また、製作活動だけでなく、地域貢献活動や他団体との取り組みを通して、活動の紹介や技術交流を図っている。小中高校生や地域企業との交流を通して地域の課題に触れることで、学生ら自身が活動を客観的に見つめ直す機会となっている。

表 1. 2024年度所属数と成果

	ロボコン	ロケット	ゲームクリエイ	阿波電鉄	エコラン	鳥人間	マイスター	計
医工融合					2	1		3
機械	10	10	5	6	15	16	1	63
電気電子	3	3	12		2	2		22
知能情報	3	5	48			3		59
光システム			6		2			8
応用化学	1	2			1	2		6
数理科学			1					1
自然科学	1	4	3			1		9
社会基盤		2			1	3		3
生物資源			2		1	3		6
総合科学	1		9			5		15
医歯業		2	2					0
大学院							2	6
計	18	27	90	6	24	33	3	201

メディア対応13件、発表13件、受賞5件、地域貢献活動17件



図5. 科学イベントへの出展（ロボコン、阿波電鉄）



図6. 技術交流（ゲームクリエイト）



図7. 放置竹林の活用（鳥人間）



図8. 高校生対象活動講演（鳥人間、ロケット）



図9. 試走試験（エコラン）

3.社会実装

社会実装担当では、世界的に活躍できるアントレプレナーを育成するため、フィンランド・アアルト大学での学生サマープログラム派遣（渡航助成あり）を開始した。2024年度は「Personal Growth and Renewal（個人の成長と再生）」プログラムに学生5名を選抜し、8/5～8/16のスクールのほか、事前研修、振り返り研修を行った。学生らは研修を通して先見性を持ち課題解決を行う資質を養うことができた。

これに関連して、徳島県教育委員会 指導主事等を対象として、ワークショップ形式によるフィンランド式アントレプレナーシップ教育勉強会を実施した。さらに、徳島大学生および教職員向けにホリスティックアントレプレナーシップ教育手法を学ぶワークショップを実施するなど、地域や大学におけるアントレプレナーシップの普及に努めた。

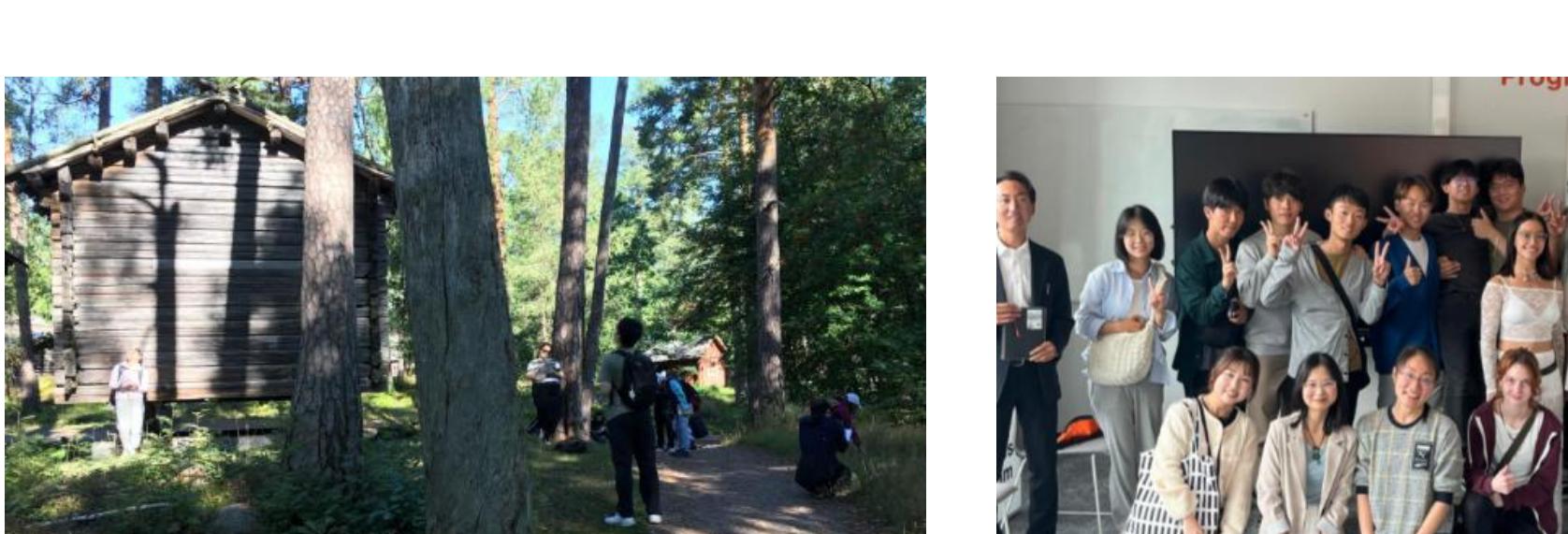


図10. アアルト大学へのサマースクールへの派遣と事後研修



図11. アアルト大学講師を招いての勉強会及びワークショップ

今後への課題

創新教育推進班では、アイデア創出、ものづくり教育、アントレプレナーシップ教育といった実践的なイノベーション教育の支援を行っている。2024年度は前年に引き続き、主軸となる活動のほか、地域連携・国際連携も積極的に行なった。学内だけでは得ることのできない、新しい視点や体験を通して活動を、学生や地域社会に提供した。学生らは自身が学ぶ側にいる場合・伝える側にいる場合の両方を体験することによって、課題解決の方法が、多岐にわたることを、身をもって理解している様子がうかがえた。

今後も自分たちがやりたいことを考えるだけでなく、その活動を通して周囲に与える影響、そして自分自身の成長がどのように変化しているのかを認知しながら活動ができるような支援を試みていきたい。